

音楽作品の「力動性」と「静止性」をめぐる Th W. アドルノの理論について

—A. ベルク《クラリネットとピアノのための四つの小品》を具体例に

西村紗知 (東京藝術大学)

本発表では、Th W. アドルノの『アルバン・ベルク』における作品分析《クラリネットとピアノのための四つの小品》における「力動性」と「静止性」の問題を考察する。本発表は、アドルノの音楽論における「時間 Zeit」の問題に対する考察の一例である。アドルノ音楽論における「時間」の問題は、複雑な様相を呈している。原因は、Zeit の語義の多義性、指示対象の曖昧さ、といった語そのものの次元の困難さに加え、アドルノ自身が Zeit 概念を定式化していないこと、主にこうした点にある。本発表では、特に作曲の技法としての時間の問題を扱いたい。

アドルノのいう音楽作品の「力動性」と「静止性」とは、第一に、作曲家の作品構成の技法のことであり、そしてそこから生み出されるニュアンスのことである。尚且つ価値中立的で、それでもそれぞれ作品分析の文脈に応じてその都度何らかの意味や価値判断が付されるものである。しかし、作曲家相互の影響関係で、力動性、静止性が引き継がれると言及される時、意味合いが異なれど、何らかの共通のものに対する指示作用を、力動性、静止性という語法は、失うものではない。

例えばアドルノは『アルバン・ベルク』において、ベルクの作品は、「いかにベルクが主題労作と発展的変奏の伝統に、すなわち徹底的に力動的に作曲するということの伝統の物の数に入るにしても、彼の音楽の手法はそれでも何か特有に静止的なものを、ためらいつつ足踏みするようなものを持っていた」とする。この記述は一見したところ、矛盾したようにも見える。力動的な作曲は如何にして静止的な音楽要素を生み出すのだろうか。

しかしこのことは、『新音楽の哲学』における力動性、静止性の音楽史上の発展過程の記述を参照すれば、ある程度納得のいくものとなる。アドルノの意見を概観するならば、音楽作品の力動性とは、元々ベートーヴェンの初期・中期ピアノソナタに特有の、動機・主題労作によって、可能となるものだった。この時力動的な音楽は、「発展的な」音楽、つまり作品内部で、カデンツや動機労作の音楽語法上の必然性を伴う音楽のことであった。しかしながらヴァーグナーから、力動的な音楽は、発展的な音楽のことを指さなくなった。そこからドビュッシーの非発展的で、静止的な音楽も、アドルノによれば、由来するのである。

アドルノ曰く、ベルクの音楽、「極微なる移行」の技巧は、ヴァーグナーの非発展的な「移行」と、シェーンベルクの「発展的変奏」という動機・主題労作を同時に引き継ぐ。ベルクの場合、ドビュッシーやヴァーグナーとは異なって、一つの作品において、力動性、静止性どちらかが一方的に支配することはない。よってベルクの《クラリネットとピアノのための四つの小品》においてアドルノは、動的な作曲からの静止的な音楽という言葉をもつて、ヴァーグナーやドビュッシーとはことなる力動性、静止性の関係付けを見出しているのである。